

特集

緑内障患者のQOLとビジョンケア

序 論

福地健郎*

本号の特集は、「緑内障患者の QOL とビジョンケア」です。

日本緑内障学会による緑内障診療ガイドラインの最新版は第5版ですが、第3版から第4版に改訂された際に、「緑内障治療の目的は、患者の視覚の質 (quality of vision : QOV) と、それに伴う生活の質 (quality of life : QOL) を維持することである」と明記されました¹⁾。第3版までの「患者の視機能を維持することである」という文言と、意図するところは同じですが、より患者の視点に立った表現という意味で、大きな違いがあります。現在、医療の各分野で QOL の概念が広く受け入れられており、たとえば内科や外科でも QOL を重視した治療が頻繁に議論されています。ある緑内障の教科書²⁾では、「かつての医療は疾患を診断し、治療し、モニターすることであった。現在の医療は加えて患者の well-being を促進することである」と述べられており、これは現代の医療の本質を的確に表現しています。緑内障には他の眼疾患とは異なる QOL の障害があり、進行に伴って QOL がどのような経過で低下していくのかを理解することは、眼科診療の質の向上にとって欠くことができないことと思います。一方、日本国内の統計によると、緑内障は20年以上にわたり失明原因の第1位で、その割合は20~30%で推移しています³⁾。今後、超高齢化

やライフスタイルの変化、高齢者の社会活動への参加などを社会的な背景として、ビジョンケアを希望する緑内障患者がさらに増加することが予想されます。このような課題に対して、テクノロジーの進歩により緑内障患者の視覚機能低下をサポートするさまざまな方法が可能となってきました。これは、ある意味で緑内障患者の QOL の向上を意味しているといえます。

この特集の前半では、主に緑内障患者の QOL について、まず結城先生には総論的な視点で解説していただきました。QOL の理解には視力や視野の基本検査だけでなく、コントラスト感度などのより高度な視覚機能検査が必要かもしれないということが提案されています。藤田先生には読書について、岩瀬先生には運転について解説していただきました。読書はビジョンケアのニーズとして最も頻度が高く、運転は患者自身の社会生活に必要である一方で社会的責任が伴う、いずれも重要な問題です。後半は主にビジョンケアについて、張替先生には緑内障に特有なビジョンケアについて、山口先生にはデジタルデバイスを活用したデジタルビジョンケアについて、最後に、中村先生に患者会である緑内障フレンド・ネットワークについて紹介していただきました。

緑内障患者の QOL とビジョンケアに関わる多岐にわたる視点で、この特集を構成できたことについて、ご執筆いただいた先生方に感謝申しあげたいと思います。読者の皆様には、ぜひご一読い

* Takeo Fukuchi 新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野

ただき、緑内障診療の一助としていただけることを期待しています。

文献

- 1) 日本緑内障学会緑内障診療ガイドライン改訂委員会：緑内障診療ガイドライン(第5版)．日眼会誌 126：85-177, 2021
- 2) Shaarawy TM, Sherwood MB, Hitchings RA et al (eds) : Glaucoma, 2nd edition. Saunders, Elsevier, 2015
- 3) Morizane Y, Morimoto N, Fujiwara A et al : Incidence and causes of visual impairment in Japan : the first nation-wide complete enumeration survey of newly certified visually impaired individuals. Jpn J Ophthalmol 63 : 26-33, 2019

*

*